

ナチュラルキス5

目次

ナチュラルキス5

式の章

披露宴の章

初夜の章

母の思い

257

161

58

6

ナチュラルキス5

（式の章）

1 心への問いかけ

「天も、この日を祝ってくれているようですわねえ」

沙帆子の髪を丁寧^{さほこ}に結び上げながら、とても上品に、それでいて朗らかに婦人は言った。

このひとはたぶん、牧師様の奥様だ。

実はこの婦人、双子なのだ。そして婦人だけでなく、この教会の牧師もまた双子で、最初に顔を合わせたときには、本当にびっくりさせられた。

「ほんとに、いい天気^{ほんとに}に恵^{あま}れましたわ」

窓の外に目を向けて、榎原沙帆子の母、芙美子は笑みを浮かべた。

「すばらしいお式になりましたよ」

「ええ」

高揚感溢れるふたりの会話に、沙帆子の心臓はトクトクと鼓動を速め始める。

お、お式だ……

つ、ついに……

そう考えた途端、背筋に震えが走った。

今日は、彼女の副担任である佐原啓史との結婚式。

ほ、ほんとに、この日がきちゃった。

彼女はごくりと唾を呑み込んだ。

今朝は六時に起きた。

軽く朝食を食べて、身支度をして……父の車で教会へとやってきた。

ずっと何か足りない気がしていた……何かを忘れてきたような……

「できましたわ」

「素敵だわあ、沙帆子」

綺麗に結び上げられた沙帆子の髪を見て、満足そうにしている婦人の声、そして感激した母の声。花嫁になるための支度をしてるんだ。人生に一度きりの体験……

もっと喜びを噛み締めたりとか……幸せいっぱいな気持ちを感じたりとか……

そうしたいのに、動揺ばかりりして、まるで味わえてない。

こ、こんなじゃわたし、絶対、後悔しちゃうのにい。

婦人は沙帆子の髪を点検するように見つめてから、部屋の中を移動し、何かを手にして戻ってきた。どうやら、メイク道具のようだ。

手際よく、沙帆子に化粧をほどこしてゆく。

沙帆子は少しずつ変化してゆく自分の姿をきちんと記憶に留めようと努力しつつ、佐原のことを考えた。

先生……もう来てるのかな？

教会に着いた途端、沙帆子はこの部屋に連れてこられた。

すでに佐原は来ているのか、それともまだなのか、沙帆子は知らない。

佐原先生……教会で待つてると、言ったのに……

沙帆子のそんな思いも知らず、花嫁への変身は、芙美子が胸をいっぱいにして見守る中、着々と進められていった。

ウエディングドレスが目の前に出された。

この間見たときより、素敵に見えた。

この一瞬だけ、動揺しっぱなしの沙帆子の心にも、高揚感が湧いた。

イヤリングやネックレスは、このものを借りることになったが、靴は母が買ってくれた。

ヒールに慣れない沙帆子のために用意された靴は、そんなに踵が高くない。

小さくて上品なりボンのついた白いエナメルの靴は、光を受けてきらめく。

まるで、シンデレラのガラスの靴みたいだ……

花嫁になる娘にぴったりの靴をと考えて、母はきつと何軒もの靴屋を回ってくれたのに違いない。

そう考えて胸がいっぱいになった。

沙帆子は、豪華なブーケを見つめた。そして素敵なベール……

結婚するんだ……これを身につけて……花嫁になって……わたし……

ほんとのほんとに……ほんとのほんとなんだよね？

何度も何度も、自分に確認を取るように、沙帆子は問いかけた。

で、でも、新郎は？

「沙帆子さん？」

婦人のやさしい声に、沙帆子は瞬きした。

「沙帆子、どうしたの？」

「えっ？」

「ドレスよ。早く着て、部屋の外で待つてるパパに見せてあげなきゃ。待ちくたびれて、叫び出すかもしれないわ」

「う、うん」

沙帆子は促されるままドレスに袖を通した。

軽い……真つ白でふわりとしたドレス。

ゾクゾクするような喜びが胸に湧き上がり、沙帆子は無意識に腰のあたりを動かしてみた。

ドレスの裾がふわふわと夢のように揺れる。

「ウエストのラインがとっても綺麗よ、沙帆子。プロのモデルにだって負けてないわ」

「ほんとうに、よくお似合いです。このドレスも、沙帆子さんの美しさを演出できて、喜んでいますわ」

美しさという言葉に、思わず目が泳ぐ。

だいたいふたりとも、いくらなんでも褒めすぎだと思う。

照れくさくてたまらなくなつた沙帆子は、真っ赤になつたほつぺたを、両手で押さえて隠した。

「綺麗だわあ。本当にこの花嫁さんは、わたしの娘かしらと思うくらい……」

「マ、ママってば……恥ずかしいよお」

困つて俯いた彼女の肩を、芙美子は後ろから両腕で包み込んできた。

「本当に……本当に綺麗なんだから……」

沙帆子の耳元で、母は囁くように言う。その声が震えていることに気づいた沙帆子の下臉に、涙が滲んできた。

「ママ……」

「まったく困つたわ。この調子じゃ、ママ、式の間中、泣いちゃいそうだわ」

ひどく渋い口調で母は言い、くすくす笑い出す。

沙帆子は思わず、自分を抱きしめている母を振り返つた。

泣き笑いのような表情をしている母……胸が詰まつた。

平静でいられないのは沙帆子だけではないのだ。

目の前の大きな鏡の中に、花嫁がいた。

まるきり、自分じゃないみたいだ。

まだベールはつけていないが、髪には真っ白な薔薇の花が、しつくりと馴染むようにつけられてゐる。

化粧をほどこされたその表情は、大人びた女性のもの。

微かな疑念が湧いた。

沙帆子は右手をほんの少し上げ、指先を動かしてみた。

確かに、彼女の意のままに動いている。

「どうやら……これは本当に、わたしらしい……」

「ほんとに綺麗……本当に……」

同じ言葉を繰り返す母に、沙帆子は唇を噛み、照れた瞳を向けた。

シックな黒のロングドレスを着た母……

「ママもとっても綺麗だよ」

沙帆子の言葉に、芙美子は笑いながら目を合わせてきた。

「ありがとう」

ハツラツとした母。

いつも沙帆子に、朗らかな明るさや、元気をわけてくれていたひと。

母の年齢になったとき、自分は母のような女性になれているだろうか？

「わたし、ママみたいな母親になれるかな？」

ぶつと芙美子が吹き出した。

「母親になる前に、妻にならなきゃ」

つ、妻？

そ、そうか。そうだよね。

わたし……佐原先生の妻になるんだ。

だが、妻という言葉は、どうにも心にしっくりこない……

本当に佐原先生の妻になるのか？ このわたしが？

母との会話で少し屈ないでいた心が、やにわに波立ち始めた。

この場に来ててもなお、沙帆子の心の中で、佐原との結婚は、現実味を帯びていない。

「ご主人様をお呼びして参りましょうか？」

「ああ、はい。お願いします。きっと、落ち着かずにうろろしていると思いますわ」

婦人は、母の言葉に笑みを見せながら、部屋を出ていった。

「ほんとに綺麗だわ。うーん、パパが心配ねえ」

「パパが？」

「土壇場どたんばになって、反旗を翻ひるがえして、暴れまわるかも」

「えっ？ な、なんで？」

「結婚式なんかさせない。お嫁になんか行かせないーって言い出しそうってことよ」

父を巧たくみに真似た母のジェスチャーに、沙帆子は思わず声を上げて笑った。

そのとき母が、ひどくほっとしたような表情を見せ、それに気づいた沙帆子は、胸がジンとした。

いまの娘の心情を、母は誰よりも正確に理解してくれている。

いつだって母はそうだった。そして、それは父も同じで……

カチャリという音がして、沙帆子は母と一緒に振り返った。

ひどくのろのろと、ためらうようにドアが開く。そして父が顔を覗かせた。

「パパ……」

父と目を合わせ、沙帆子は呼びかけた。

幸弘ゆきひろはドアから顔を出したまま、それ以上動こうとせず、沙帆子をじっと見つめる。

「パパ？ なんで入ってこないの？」

「……沙帆子……か？」

「そ、そうだよ。変なパパ」

沙帆子はわざと冗談めかして言った。

父のこの反応は当然だ。彼女自身、いまの自分が自分だと思えないくらいなのだ。

幸弘は沙帆子を見つめたまま、無言で部屋の中に入ってきた。

照れくさくなり、沙帆子は顔を伏せた。目の前にやってきた父は、黙り込んだままだ。

「あの……パパ？」

「誇こほらしいよ、沙帆子」

ようやく口を開いた幸弘が言った。声が震えている。

その震えが、直接胸に伝わってきて、沙帆子は胸がきゅんとした。

幸弘は妻に向き直った。

「こんな綺麗な花嫁は、芙美子ちゃん以来……初めてだ」

芙美子が笑みを浮かべて応える。

「どうです。綺麗じゃないですか？」

父ときたら、後ろから入ってきた婦人に同意を求めるように言う。

「パ、パパったら……」

もちろん婦人は大きく頷いてくれたが、沙帆子は恥ずかしくてならなかった。

「もおっ、パパあ」

沙帆子はいさめるように父に呼びかけたが、幸弘は気にもとめない。

この場にいるのが母だけならいざ知らず……婦人の手前、どんな顔をしていいのやら困る。

数分間、花嫁の父に、あでやかに着飾った娘の鑑賞の時間が与えられ、そのあと、先程まで父がいた部屋に移動することになった。

慣れないドレスでの歩行に、母と婦人に介添えをしてもらいながら隣の部屋に移ると、沙帆子はその場で一番豪華な椅子に座ることになった。

どうやら、結婚式の主役というのは、照れくさい状況を、延々と味わわなければならないらしいか
った。

それにしても……もうひとりの主役はどこにいるのだ？

式が始まる予定の時刻まで、まだ二十分ほどあるけど……

佐原は、この部屋に来るのだろうか？

いまの沙帆子を見て、彼はどんな顔をするだろうか？ どんな反応を見せるだろうか？

喜ぶだろうか？ それともびつくりする？

ノックの音が響いた。

沙帆子はきゅっと緊張した。

も、もしかして、佐原先生？

沙帆子の姿を目に焼き付けるのに忙しいらしい両親の代わりに、婦人がノックに答えた。

佐原がやってきたのではと、期待と緊張でさんざんドキドキしていたのに、入ってきたのは牧師
だった。牧師は挙式用らしい衣装を身につけていて、沙帆子は厳かな気持ちになった。

ふたごの片割れである牧師の弟も、続いて入ってきた。こちらはビデオカメラを携えていて、す
でに撮影態勢で肩のあたりに構えている。

「今日は、どうぞよろしくお願い致します」

挨拶の言葉を丁寧口にしつつ、幸弘が深々と頭を下げ、父の横に並んだ母も、同じように頭を
下げた。もちろん沙帆子ものんびり座ってはいられない。立ち上がって、その場でお辞儀した。

牧師の目が、沙帆子に向いた。

「言葉にできぬほど、美しい花嫁ですね」

牧師から思いやり溢れた賛辞をもらい、彼女は頬を染めた。

「本当に美しいな。……言葉は不自由なものだねえ。これほどの美を前にしては、それを表現する

に相應しい言葉を見つけられないよ」

牧師の弟は、ビデオカメラを沙帆子に向けたまま、大仰すぎる褒め言葉を口にする。こちらの賛辞については、もうどう反応していいやら、わからなかった。

「お前の言うとおりで」

牧師はやさしい笑みを浮かべて弟に同意し、沙帆子の前にやってきた。

「沙帆子さん、どうぞ座ってください」

「は、はい」

沙帆子は赤くなった顔でしどろもどろに答え、言われるまま椅子に座った。

やたら、緊張した。

牧師の正装のせいかもしれない。

鼓動が速まる。いよいよ式が始まるのか？

不安がむくむくと湧いてきた。結婚式で、自分はいったいどういふうにして、何を言えればいいのか、何ひとつ知らない。

「あ、あの。わたしは……花嫁さんって、式の間、何をすれば……」

牧師はやわらかな笑みを広げた。

「心配しなくても大丈夫ですよ。式は、貴方と新郎の時に合わせて進みます。急ぐ必要などないし、すべてゆっくりでよいのです」

「で、でも。やることがわかってないと……」

「その場その場で、ご説明します。なんの心配もいりません」

そ、そんなものなのか？

彼女は思わず、結婚式を経験済みの両親に、問うような目を向けた。

「沙帆子さん」

牧師から声をかけられ、沙帆子はすぐに顔を戻した。

「はい」

「貴方にひとつだけ質問があるのです」

そう口にする牧師の、ひどく真剣な眼差しに、沙帆子は戸惑った。

「質問……ですか？」

牧師は無言で頷く。

沙帆子はおのずと姿勢を正していた。

「自分の心に問いかけてみてください」

こ、心？

「佐原啓史さんと結婚することに、迷いはありませんか？」

沙帆子は、思わず目を見開いた。

固まってしまった沙帆子に、牧師は一度温かな笑みを浮かべ、また口を開いた。

「沙帆子さん、私の務めは、愛し合う者同士を祝福し、夫婦となるための儀式を執り行なうことです」

「は、はあ」

「佐原啓史さんを愛する、揺るがぬ心が……ご自分の中にあるのか、問いかけてみてください。時間には気がせず、さあ」

両親に救いを求めるために、思わず視線を向けようとしている自分に気づき、沙帆子はぐっと思いとどまった。

いま、それをしてはいけないのだ。

佐原先生を愛する、揺るがぬ心がわたしの中にあるのか、牧師さんは聞きたいのだ。

……先生は、どうなのだろう？ わたしを……？

彼女は心の中で首を振った。

いま、問われているのは沙帆子の心で、佐原の心ではない。

彼女は無意識に、両手を自分の胸に置いた。

なら、答えは簡単だ。

「……迷いはありません……」

思ったより、か細い声になった。沙帆子は深く息を吸い、もう一度繰り返した。

「迷いはありません。わたし……佐原先生が好きだから……」

一気に口にした沙帆子は、牧師の顔をまっすぐに見つめた。

牧師の瞳には、勇気をくれる強くて温和な光があった。

「先生を愛する心に、揺るぎなんてありません」

「わかりました」

牧師は深く頷き、口元にやさしい笑みを湛えた。

「夫婦となるということに、互いの自由を奪うくびきなど生じません。結婚とは、互いを繋ぐためのものではないのです」

牧師は一拍置いて、また口を開いた。

「ふたりの心に愛があれば、自然と心は繋がりがたがる」

その牧師の言葉は、すんなりと彼女の胸に沁み込んでいった。

沙帆子は目を閉じて頷いた。

「見守る者たちがいることを、いつも忘れずに……ひとを愛する楽しさを味わってください」

牧師はおもむろに沙帆子の前に跪くと、驚く彼女の両手を取って瞳を覗き込んできた。

「貴方に、神の祝福を……」

牧師はゆっくりと立ち上がった。

「それでは」

三人に向けてお辞儀をすると、牧師は婦人を見つめた。婦人が頷くと、牧師はゆつたりとした足取りで部屋から出ていった。

牧師の弟は、まだそこにおいて、いまはビデオカメラを沙帆子の両親に向けていた。

「さあ、お式の時間ですわ。参りましょう」

その一言で、緊張が増した。

ボールをつけ、促されて歩き出した沙帆子の足は、極度の緊張から小刻みに震えていた。

2 愛するひとへの歩み

肌をそっと掠めてゆくような快い風が、ベールをやさしく揺らす。右に父、左に母……そして、沙帆子のベールとドレスの裾を気遣いながら後ろについてきてくれる婦人……

外は静かだった。

聞こえるのは、小鳥のさえずりと木々の葉が揺れる微かな音だけ……教会の建物はすぐそこなのに、ひとの気配などまったくない。

フェイスベールで視界が霞んでいられるせいか、その風景は異質に見えた。

震える足で歩む沙帆子の胸に、極度の不安が押し寄せてきた。

場違いな格好で、場違いな場にいる気がしてならない。

胃のあたりが浮いているようなおかしい感覚がたまらず、沙帆子は何度もお腹を手でさすっていた。

親子三人してこの場にいるのは、何かの間違いなんじゃないだろうか？

結婚式なんて、ほんとのほんとは行なわれるのだろうか？

本当に、みんな来ているのだろうか？

挙式の前に、佐原だけでなく、親友である千里や詩織とも会えると思っていたのに……誰ひとり会っていない。

沙帆子はフェイスベールの奥で唇を噛んだ。

教会の中に、誰もいなかったりして……

本気でそんな怖れに襲われる。

佐原の、待っているという言葉や、沙帆子はそのままに受け止めていた。だから、ここに着いたら、佐原自身が彼女を出迎えてくれるものと思いついていたのだ。

「沙帆子？」

父の声に沙帆子はハッとされた。

物思いに囚われすぎて、歩むことを忘れていたようだった。

「やめたくなったのか？」

「幸弘さんったら、それはあなたの願望でしょう？」

「花嫁の父の心境は……複雑なんだよ」

「パパ……ママ……あ、あの……」

「なあに、沙帆子？」

「み、みんな、ほんとに来てるのかな？」

「来てるに決まってるじゃない」

「でも、だって、先生、見てないし……千里も詩織も見えてないし……不自然なくらい静かだし……」

「沙帆子さん、皆様、教会で、花嫁の貴方の登場をお待ちですよ」
後方からかけられた声に、沙帆子は振り返った。

「ほ、ほんとに？」

「はい。私は、皆様と、お会いしています」
婦人の微笑みに偽りは無い。

沙帆子はほっとした。

「沙帆子、お前はしあわせになる。だって、お前は美美子ちゃんと僕の娘だからね。不幸になるように生まれついていないんだ」

父の好き放題な言い草に、沙帆子は笑おうとしたが、うまくできず、唇が震えた。

「おお、そうだった。入場するときには、決まったステップがあるんだ。お前が花嫁に変身している間に、入場の説明を受けたんだ」

決まったステップ？

沙帆子は目を丸くした。

結婚式の入場のと違って、普通に歩くんじゃないかって、ステップなんてものを踏むのか？

そんな決まりがあったとは、初耳だ。

「そ、そんなのがあるの？」

にわかに不安に取りつかれた。

ただ歩くだけでも、緊張のせいで足が震え、よろめいてしまいそうなのに……直前になってステ

ップを教えられて、うまくやれるとは思えない。

もしかして、そのステップというのは世間の常識で、誰でも知ってたりするものなのだろうか？

「それって、知ってて当たり前なの？」

「当たり前前ってほどじゃないわよ。ママも幸弘さんのお式ときにはやったけど……正直、舞い上がっちゃってて、あんまり覚えてないわね」

くすくす笑いながらの母の言葉は、沙帆子をほっとさせた。

「ママも、結婚式するとき、舞い上がっちゃってたの？」

「ええ、もちろんよお」

母はそう言いながら沙帆子の前に立ち、視界を曇らせていたフェイスボールを上げてくれた。目を合わせた母は、彼女の手をやさしく握り締め、にっこり微笑んだ。

「沙帆子だけじゃないわ。花嫁さんは大なり小なり、みんな緊張するし、舞い上がっちゃうものよ」

「そ、そうか……だよね」

沙帆子は母に笑い返ししながら、何度も頷いた。そして大きく息を吸って吐いた。

いまの自分の状態は、花嫁という立場ならば当然なのだ。

「ほら、沙帆子。練習だ、練習」

そうせつつくように父が言う。母は笑いながら彼女に手を差し出してきた。

「沙帆子、ブーケはママが預かってくわ」

「うん」

ブーケを母に手渡し、沙帆子は父のほうを向いた。

幸弘はすぐにステップの説明を始めた。

「まず、扉が開いたら、ちょこつと進んで……そうだな、止まるタイミングが揃ったほうがいいから……三歩歩こう。それで、揃ってお辞儀だ。いいか、沙帆子？」

幸弘は沙帆子の前で三歩歩き、腰を折ってきつちり頭を下げてみせる。

「う、うん」

そう答えたものの、父の説明は、ちっとも頭に入ってきていなかった。

しっかり覚えなきやと、切羽詰まった気分ではいるっていうのに……

「こう、頭だけ下げないってのが、大事だぞ。こんな風に腰から折るんだ。参列者に対して、感謝の気持ちがかもるし、相手にも伝わるからな」

沙帆子は父に向けて真剣な顔で頷いた。

頭だけ下げない……腰から折ってお辞儀……腰から折ってお辞儀……

息すら止めて頭の中で重要点を繰り返していると、幸弘は沙帆子の右隣に戻ってきて、右足を踏み出した。そして右足に左足を揃える。

たったそれだけのことなのに、うまくやれる自信が持てず、不安がどんどん膨らんでゆく。

「こうやって、一歩踏み出すごとに、止まるんだ。次は左足、揃えて止まる」

止まる……右足を出して、止まる。いや違う……揃えて……？

ドレスに隠れて見えない自分の足を必死に見つめながら、頭の中でステップを覚えようとするが、

どんどんこんがらがってくる。

「ドレスの裾が長いから、踏みつけたりしないように、少し蹴り上げる感じで歩くといいと思うわ」

「け、蹴る？ ママ、ど、どんな風に？」

決まったステップを踏むことすら危ういつてのに、その上下ドレスの裾を蹴ったりもしなきやなら
ないというのか？

「沙帆子」

やさしい呼びかけに、沙帆子はパニックに襲われたまま母親のほうを向いた。

「大丈夫よ」

「えっ、な、何が？」

意味がわからず、急ぐように聞き返した途端、沙帆子は母に抱きしめられていた。

「落ち着いて。焦らなくていいの」

「ママ……わ、わたし……」

母の手がやさしく背中を叩いてくれていることに、沙帆子はようやく気づいた。母の肩越しに、父と目が合った。沙帆子を気遣わしげに見つめている。

「ママ……パパ……」

沙帆子は、思わずふたりに縋すがるような声をかけていた。

父が歩み寄ってきて、笑みを浮かべながら沙帆子の肩に手を置いた。父と母、ふたりのぬくもりを感じて、無意識に強張こわばらせていた肩から少しだけ力が抜けた。

「わたし……あの……ごめんさい」

他に言葉が思いつけず、沙帆子はふたりに謝った。

それでも、差し迫っている挙式のことを考えると、胃のあたりが浮いているようなおかしい感覚はますますひどくなつてゆく。

「な、なんか、色々あって……。歩くだけなのに……。わたし、やれるかな？」

「沙帆子、間違えたって大丈夫だ。ウエディングドレスの裾は長いからな、ステップをいくら間違えたって、誰も気づきやしないさ」

「そ、そう？」

「ええ。なんの心配もいらないわ。ゆっくり、ゆっくり歩くから、大丈夫よ」

沙帆子を見つめている両親の眼差しは、心に温かかった。

ふたりがいてくれるのだ。だから大丈夫だ。

安堵した彼女は、てんばっていた自分を改めて意識し、ひどく恥ずかしくなった。

「うん」

沙帆子はふたりに向けて頷き、照れた笑みを浮かべた。

そのあと、三人揃って、ブライダルステップというらしい、足の運びを練習した。

式が始まる直前になって、こんなことをやっていいのかと思ったりもしたが、ずいぶんトリラックスしてきているのを感じ、これで良かったのだと思えた。

「そろそろ参りしましょうか？ 新郎様が、首を長くして待っていらっしゃいますよ」

三人の練習ぶりを、少し離れた位置で見守ってくれていた婦人が、タイミングを見計らって声をかけてきた。

し、新郎様？

そうだ。新郎様は、佐原先生のこと……。わたしを待っていてくれるはずで……

ステップの練習で落ち着いてきていた心臓が、やにわに鼓動を速めた。ドキンドキンドキント、胸板を突くように大きく跳ねる心臓を少しでもおとなしくさせようと、沙帆子は何度も大きく息を吸って吐いた。

「沙帆子」

両親が声を揃えて彼女を呼び、ふたり揃って手を差し出してきた。

沙帆子は両親の手を握り締め、教会に向かって歩き出した。

教会の扉の前には、若い女性スタッフがいて、彼女たちを目にすると、深々と頭を下げてきた。「この度は、おめでとごさいます」

落ち着いた仕草でお辞儀を返す両親のようにはゆかず、沙帆子はひどく焦りながら頭を下げた。

扉の向こうから、音楽が漏れ聞こえてくる。

すでに、佐原はこの中にいるのだろうか？ みんなも？

これからいったい、どうすればいいのだろうか？

思わず婦人を見ると、携帯を耳に当てているところだった。だがすぐに話を終えたらしく、婦人

は携帯をしまうと、女性スタッフと頷き合った。

沙帆子のドレスに乱れがないか、チェックらしきものが行なわれ、フェイスベールもふわりと下ろされた。

いよいよという雰囲気、緊張が高まる。

父が沙帆子の右側に立ち、彼女は父の腕を取った。

「沙帆子」

母がブーケを手渡してきた。ブーケを受け取った沙帆子の左腕に、母は軽く手を添えてきた。

「ママ？」

「もちろんわたしも一緒にバージンロードを歩くわよ。幸弘さんとふたりで、啓史君に沙帆子を託すの」

楽しそうに瞳をきらめかせている母に、胸をいっぱいしながら沙帆子は頷いた。

沙帆子は父を見つめた。父もまた沙帆子を見つめ返してくる。その父の目尻に、涙が滲にじんでいるのを目にしてしまい、胸が震えた。

泣き出しそうになった沙帆子は、また母のほうを向いた。

芙美子は、沙帆子の手の甲をやさしくぼんぼんと叩いてくれた。

何度こうやって、母は、慰めや勇気を彼女にくれただろう……

そして、彼女に無条件の安らぎを与えてくれていた父……

「では、扉を開きます」

婦人が柔らかな声で言った。

沙帆子は込み上げてくる熱いものを呑み込み、目の前の扉を見つめた。

扉がひどくゆつくりと開き始めた。

教会の中は、この間とはずいぶん違い、荘厳な雰囲気を保ちながらも、華やかな色合いをしていたが、そんな周りの景色を意識に入れる余裕など、いまの沙帆子にはなかった。

彼女の目は、教会の中に立つ、男性だけを捉えていた。せ、先生なの？

丈の長い黒い上着を着ている。

上着の裾から伸びる細身の長い足……

上半身を後ろへと捻り、微動だにせず、沙帆子を見つめている。

「沙帆子」

そっと、促うながすような父の囁ささやきが聞こえた。

沙帆子は父に顔を向けようとしたが、全身が緊張で強張こわばっていて、うまく動けない。沙帆子はぎこちない動作でようやく首を回した。

「行くよ。まず三歩前に……だよ」

彼女は父の腕にかけた手に力を入れた。

母の手にじんわりと力が込められ、父も空いている右手で、勇気づけるように沙帆子の手に触れ

てきた。

父と母が一緒なのだ。

そして目の前には佐原がいる。

教会で待っていると、言ってくれた先生が……

「行くぞ」

父の小さな声に、沙帆子はこくりと頷いた。

両親が、揃えたように足を踏み出し、沙帆子もそれにならった。

三步進んだあとのお辞儀がうまくできたのか、正直まったくわからなかった。

頭の中は、いまやふわふわと浮いていて、思考が現実を追いつかない。

一步前に出て、足を揃える。そして、また反対の足を踏み出す。

どれだけの時間を費やしているのか、もう沙帆子には判断できなかった。

佐原は、とても遠く感じた。

3 安堵の吐息

うまくやったのか、間違えてばかりだったのか、永遠に続くと思えたブライダルステップの末、ようやく佐原の目の前に来た。

不安と緊張のせいで、佐原の顔に視線を向けられず、おどおどした心持ちでいると、父が佐原に向けて口を開いた。

「しあわせにしてやってくれるな？」

ひっそりとした静かな父の声が、沙帆子を取り巻く空気を震わせた。

「言われるまでもありません」

きつぱりとした佐原の言葉……

その声に、沙帆子はパツと顔を上げていた。

フェイスベール越しに、沙帆子は佐原を見つめた。

硬い表情の佐原は、父をまっすぐに見つめている。

「その言葉、決して忘れるなよ」

「忘れることはありません」

重みのある厳かなやりとりだった。

ふたりが口をしているのは、わたしのことなんだよね？ と、マヌケなことに、沙帆子は遅れて

考えた。

言われるまでもなく……しあわせにつて……佐原先生……

「貴方みたいな息子を持てるなんて、鼻が高いわ」

佐原はさっと母のほうを向いた。

硬い表情を崩さなかった佐原の口元に、微かに笑みが浮かび、すぐに消えた。

沙帆子は、佐原のその一瞬の笑みに見惚れた。

「ありがとうございます」

佐原のその言葉を合図にしたように、父は自分の腕を掴んでいる沙帆子の手を取り、佐原へと差し出した。

佐原の前に差し出されている自分の手……佐原はなかなか手を取ろうとせず、いつまでも凝視している。

不安が湧いた。この手を、佐原は取ってくれるのだろうか……？

不意に佐原が視線を上げてきた。そして、沙帆子をベール越しに見つめる。

その眼差しの強さにわけのわからない恐れを感じ、胸が震えた。彼女はくんと喉を鳴らした。喉がひどく渴いているのか、引きつるような違和感を覚えた。

佐原は無表情のまま何も言わず、沙帆子の手を取ると、自分の腕に絡めさせた。

彼の動きに合わせ、沙帆子は心の整理がつかぬまま、祭壇へと踏み出すことになった。

ぼうっとしていたからなのか、足の震えがひどくなったからなのか、彼女はステップを踏みそこなった。

ドレスの裾が足先に絡み、彼女は大きくよろめいたが、さっと動いた佐原が、すぐに身体を支えてくれた。

「ご、ごめんなさい」

沙帆子は、顔を赤らめながら硬い声で謝った。

「俺に掴まってる。支えてやる」

囁くような言葉どおり、佐原は沙帆子の腕を脇で固定するように、力強く支えてくれた。

一歩ずつ、ゆっくりと進む佐原に、沙帆子は従った。

ドクンドクンと跳ねるように心臓が動いているのを自覚すると同時に、彼女はこれまで意識できていなかった参列者たちに目を向けた。

すぐ側に千里と詩織がいた。ふたりとも頬を紅潮させ、大きな笑みを浮かべていた。

千里は黒いシックなドレス、詩織は水色の可愛らしいドレスを着ていて、どちらもよく似合っていた。もちろん言葉を交わすことはできなかったが、目が合った瞬間、ふたりとも頷いてくれた。

右側の席には、佐原の親友の飯沢敦、そして感極まった顔をしている学校長夫妻。学校長の橘広勝は佐原の伯父だ。沙帆子はその妻である麗子と目を合わせて小さく頷き、夫妻の前列にいる男性ふたりへ視線を移した。

佐原の弟の順平、そして兄の徹……

順平は感激したような表情を浮かべていたが、徹の顔に笑みはない。まるで、何かを憂いているような色があった。だが、沙帆子はそのことを気にかける余裕はなかった。

沙帆子の目は、佐原の父、宗徳を捉えた。宗徳はひどく気難しい表情で、佐原に向かって頷いた。彼女の心臓が、痛いほどに収縮した。

佐原の両親も徹も、この結婚に諸手を挙げて賛成というわけではないのだった……
いまのいま、そのことを思い出し、沙帆子は不安に取りつかれた。

足の力が抜けて一瞬へたりこみそうになったが、それに気づいたのか、佐原が腕に力を入れて助けてくれた。

佐原が沙帆子に顔を向けてきた。

気遣わしげな表情……

先生……わたしのこと、心配してくれてる？

わたしとの結婚、嫌がってないし、後悔してないよね？

沙帆子の表情に何を見たのか、佐原は眉をきつくひそめ、口元を強張らせた。

その様子は、彼女を混乱させた。

だがすでに、沙帆子は佐原と並んで祭壇の前に立っていた。

逡巡などしている場合じゃない。

式は始まっている……

祭壇には牧師が、左側には聖歌隊らしい揃いの衣装を着たひとたちが立ち並んでいた。

いつの間にかやら、美しくこの場を盛り上げていた音楽も止まっていて、チャペル内はひっそりと静まり返っている。

牧師が、沙帆子に向かって微笑んだ。その笑みは安心感を与えてくれるもので、彼女は牧師を見

つめ、感謝の頷きを返した。

横手から婦人がやってきて、佐原に何かを手渡した。

受け取った佐原は、それを広げて沙帆子に見せた。

譜面だ。そう思ったとき、厳かにオルガンの音が響き始めた。

耳に覚えのあるメロディだった。

聖歌隊の澄み切った歌声が、チャペル内を包み込むように流れてゆく……

知っている声も、いくつか背後から聞こえてきた。

どうも自分は、いま起こっている出来事を、断片的にしか認識できていないようだった。

頭の中は混沌とし、目は譜面の歌詞を追っているものの、声を出して歌うことはできなかった。

佐原の声も、聞こえてこない……

結婚式なんだよ。

彼女は、途方に暮れる思いで自分に言い聞かせた。

今という今、結婚の儀式の真つ最中……

高揚感を感じていながらも、ひどく心が重い……

憧れの先生との結婚式、頭がショートしそうなほどのしあわせを感じているのに……この心の重

さは……

佐原の家族に祝福されていないからだけでなく、この場を迎えた、いまの佐原の気持ちがいぜんぜ

んわからないから……

先生……本当に後悔してない？

ふたりの間にあった譜面が突然目の前から消え、思いに囚われていた彼女は我に返った。

牧師が、静かに語り始めた。

聖書の一説を説く、よく響く低い声……

いつもの沙帆子ならば心に響くであろう言葉が、脳を素通りしてゆく。

沙帆子は泣きたくなった。

一生に一度の結婚式……すべてを心に留めておきたいのに……

できるならば、正常な働きを放棄しているとしたか思えない頭を、思い切り叩いてやりたかった。

沙帆子は牧師の声を聞き取ろうと、牧師の唇に意識を向け、目を凝らした。なのに、どうしても

言葉は意味を持って脳に届かない。

駄目だ……わたし、駄目だ……諦めを感じた途端、身体がひどく冷たいことに気づいた。

それに、足元の感覚が……まるでない……

わたし……どうして立っていられるのかな……？

「すみません。少し待っていただけますか？」

佐原の声が聞こえ、沙帆子はぎくしゃくとした動きで首を回し、彼を見上げた。

「沙帆子？」

「は……い？」

先生のシャツ、白だ。ベストは……グレーで……カッコイイ……

写メ撮りたい……

そんな呆けたことを、マジに考えている自分……

やっぱ、いまのわたし……おかしいのかも……

手に温かなものが触れた。

彼女は熱を得た自分の手をじっと見つめた。

ぬくもりが、指の先からじわじわと腕を伝い、身体中に沁み渡ってゆく。

沙帆子は、佐原に手を握り締められていることに、遅れて気づいた。

そして、彼女を見つめている佐原の眼差し……

いぶかしげ？ それとも気遣わしげ？

「せ、先生……？」

ひどく震えた声だった……そんな声を出している自分が情けなかった。

挙式の最中なのに……祭壇の前に立っているというのに……

頭はまっしろりで、まともな思考もできなくて、先生に迷惑をかけてる……

あまりに駄目な自分に泣きたくなり、沙帆子は顔をくしゃりと歪めた。

「大丈夫だ」

佐原はそれだけ言った。

沙帆子は何がわかったわけでもないのに、佐原の手を握り締めたままこくりと頷いた。

佐原のこの手のぬくもりは、沙帆子のことを受け入れてくれている証だと思えた。

「すみませんでした。続けてくださいますか？」

神妙な声で、佐原は牧師に言った。

佐原の手は、沙帆子の手をきつく握り締めたままだ。

いや、沙帆子自身が、佐原の手を離したくなくて一方的に掴んでいるのか？
こ、こんなでいいのだろうか？

結婚をする一人前の女性らしく、もつと、ちゃんとしなきゃいけないんじゃないだろうか？
佐原の家族は、こんな情けない沙帆子の姿を目にして、どんな思いを抱いているだろうか？
ほんとに頼りない子だと、思われているんじゃない……

不安な思いで佐原の顔を覗き込もうとした沙帆子は、「誓いの言葉」という声にどきりとし、きゅつと口を閉じた。

ち、誓いの言葉……？

い、いつたい……自分は、どんなタイミングで、なんとさえばいいのだ？

「新郎、佐原啓史……」

流れるように牧師の言葉が始まった。

緊張した沙帆子は、思わず肩を強張らせて姿勢を正した。

「貴方は、ここに居る榎原沙帆子を、病めるときも、健やかなるときも、富めるときも、貧しきときも、妻として愛し、敬い、慈しむことを誓いますか？」

佐原の手に、力がこもった。

「誓います」

誓いに相応しい、凜とした声が響いた。

沙帆子は、ごくんと喉を鳴らした。

ち、誓っちゃったよ……先生……

病めるときも……健やかなるときも……な、なんだっけ？

「新婦、榎原沙帆子」

先程の牧師の言葉を、記憶に刻もうと必死になっていた沙帆子は、自分の名を呼ばれたことにぎよつとして、牧師を見つめた。

「貴方は、ここに居る佐原啓史を、病めるときも、健やかなるときも、富めるときも、貧しきときも……」

牧師の言葉の途中で、佐原の手の力がさらに加わった。

思い……過ごしだろうか……佐原の指先が、小刻みに震えているように思えてならない。

「夫として愛し、敬い、慈しむことを誓いますか？」

沙帆子は無意識に顔を上げて佐原を見つめた。

佐原も沙帆子を見つめていた。

佐原の表情に、沙帆子は面食らった。その硬く強張った真剣すぎる顔は、ボールを挟んでいるせいなのだろうか……青ざめているようにも見えた。

先生、気分が悪くなっただんじゃ……。それって、結婚するのが嫌で？

沙帆子は自分に向けて首を横に振った。

違う……先生は誓ってくれた。「誓います」と迷いのない声で……

彼女は牧師のほうを向いた。

牧師をまっすぐに見つめた沙帆子は、お腹にぐっと力を入れ、口を開いた。
「誓います」

緊張で喉が渇きすぎていて、少し掠れた声になった。さらに震えてまていた。
それでも、やり遂げた思いでほっとした沙帆子の耳に、佐原の吐息が聞こえた。
佐原の唇からこぼれ出たその吐息には、彼女には窺い知れない深い安堵が込められていた。

4 まごころの贈り物

「それでは、指輪の交換を……」

朗々とした牧師の声が礼拝堂に響き渡った。

ゆ、指輪の交換……するんだ……

おどおど感を高めつつ、沙帆子は目玉だけをきよるきよるさせて、あたりを見回してみた。だが、指輪が入っている濃紺のビロードの箱は、どこにもない。

心臓が鼓動を速め、胃がきゅつとした。

せ、先生、まさか、持つてくるの忘れたんじゃ……

そのとき、存在をまるで感じさせずに、婦人が近づいてきた。

手を差し伸べてきた婦人に、指輪のことばかりに気が向いていた沙帆子は、無意識にブーケを手

渡していた。

おろおろしつつ沙帆子は隣に立つ佐原を見上げたが、彼は平然とした顔つきで前を見つめている。
「このリングピローは……」

牧師の声に、沙帆子は視線を前へと戻した。

り、りんぐびろー？

なにやら、牧師さんは、真っ白なものをささげ持っていらっしやる。
な……なんだろ？

「新郎の母による手作りです」

手作り？

「あ、あら……」

驚きの混じった戸惑った呟きは、佐原の母が発したもののようだ。

「かつ、かつわいい」

「うんうん、ほんとお」

感激を含んだその声は、詩織と千里だ。

「佐原の母さん、すっげーな」

明るく叫んだのは飯沢に違いない。

「あっちゃなんてば、場をわきまえた言葉を使わないと」

新婦側の席から、千里の焦りを帯びた、いさめるような声が飛んだ。あっちゃんというのは、飯